

令和2年度

獨協医科大学教育セミナー



主催： 獨協医科大学SDセンター

令和2年度獨協医科大学教育セミナー開催のご挨拶

獨協医科大学 SD センター長 種 市 洋

SD (staff development)センターは『「社会のために」教育・健康・研究に関する課題に対して、主体的に分析し改善を図る事ができる人材を育成します』を mission に、①医療教育に関する役割遂行能力を向上させる、②自ら資質向上を図り行動できる人材を育成する、③相互成長（共育）を目指す教職員の人材育成を図る、の3つを vision に掲げ資格管理部門、教員研修部門、看護教育部門、職員研修部門の4部門が組織され、大学全体としての研修を通し教職員の質の向上を目指しています。

今回で第8回目となる獨協医科大学教育セミナーは、看護教育部門（旧看護教育センター）が平成25年度に看護系職員を対象に開催したのを端緒に、平成26年度からはその対象を全教職員に広げ職員研修部門が担当し発展的拡大を図り開催しています。

本学は、医科大学・看護学部・附属看護専門学校・附属看護専門学校三郷校の教学関連部門と大学病院・埼玉医療センター・日光医療センターの病院部門から組織されていますが、各部署（部門）がその組織の垣根を超え本学の建学の精神や病院理念、経営に関して横断的に管理・運営を図り、相互に発展させることが必須です。また、3病院の運営では経営が重要な課題であるため、教職員教育に関する研修が必要であり、これが職員一人ひとりの努力と組織間の協調と協力により本学全体での取り組みと改善に繋がることとなります。

今回のプログラムでは、「コロナ禍における業務改善の取り組み」がテーマであり、医科大学全体に係る内容であることは大学全体として共有すべきものです。獨協医科大学教育セミナーが本学の理念と経営への共通認識への一助となるものと確信しています。

最後にこのセミナー開催にあたり携わった教職員の方々に感謝いたします。

オンデマンド

- ・テーマ：コロナ禍における業務改善の取り組み
- ・公開開始日：令和3年2月22日（月）から（予定）
- ・公開ページ：獨協医科大学リポジトリ（下記URL or 右記QRコード）
<https://dmu.repo.nii.ac.jp/>
- ・備考：各演題、10分程度の動画（MP4形式）となります。
PC、スマートフォン、タブレットからご視聴いただけます。
（※視聴には、DUSMnetアカウントでのログインが必要です。）



【開会挨拶】

学長挨拶	獨協医科大学学長	吉田 謙一郎
センター長挨拶	獨協医科大学SDセンター センター長	種市 洋

【一般演題 口演】

- 〇ー1 新型コロナウイルス流行早期における抗体保有率の調査
○石川 知弘、高橋 知里、布矢 純一、佐藤 洋隆、篠崎 由季、増田 道明
(獨協医科大学微生物学)
- 〇ー2 コロナ禍—ピンチをチャンスに。医療現場におけるICT化の取り組み— (※)
○柴崎 郁子、小川 博永、武井 祐介、手塚 雅弘、関 雅浩、加藤 昂、
大橋 裕恭、斎藤 俊輔、緒方 孝治、福田 宏嗣
(獨協医科大学 心臓・血管外科学)
- 〇ー3 看護学部の取り組みとその評価 第1報 遠隔授業
○小西 敏子、馬醫 世志子、板倉 朋世
(獨協医科大学看護学部)
- 〇ー4 看護学部の取り組みとその評価 第2報 学生支援
○板倉 朋世、馬醫 世志子、小西 敏子
(獨協医科大学看護学部)
- 〇ー5 コロナ禍における業務改善の取り組みと学生の感染に係る対応 (※)
○藤森 祥会、金子 智明
(獨協医科大学学務部)
- 〇ー6 図書館におけるコロナ禍での対応
○篠崎 徳子、吉新 裕昭、森戸 重男
(獨協医科大学図書館)

- ー7 看護師特定行為研修の開催状況—コロナ禍での安全な研修をめざして—
○永井 睦子
(獨協医科大学SDセンター)
- ー8 コロナ禍における安全な研修会の開催 —各研修の目的や内容に応じて—
○円谷 亮二、廣瀬 紗彩、豊田 訓子、梅田 奈津美、江口 啓子、飯村 礼華、
斎藤 裕、永井 睦子、早田 美穂、井上 宗典、仁戸部 富恵、種市 洋
(獨協医科大学SDセンター)
- ー9 コロナ禍における本校の取り組み
○宇佐見 規子、教職員一同
(獨協医科大学附属看護専門学校)
- ー10 COVID-19 感染症病棟体制構築の経過報告 (※)
○生井 郁子、上野 秀子
(獨協医科大学病院看護部)
- ー11 新型コロナウイルスの重症患者受け入れに対する準備と業務改善
○寺内 浩美、中田 哲也、神馬 千登勢
(獨協医科大学病院看護部)
- ー12 コロナ禍における臨床検査センターの取り組み
○新保 敬¹⁾、田中 光昭¹⁾、池田 眞由美¹⁾、堀内 裕次¹⁾、福島 篤仁²⁾、
小飼 貴彦²⁾、菱沼 昭²⁾
(¹⁾獨協医科大学病院臨床検査センター ²⁾獨協医科大学感染制御・臨床検査医学)
- ー13 C4病棟における取組
○寺澤 友恵
(獨協医科大学埼玉医療センター看護部)
- ー14 重症 COVID-19 患者受け入れ
○安藤 和子
(獨協医科大学埼玉医療センター看護部)
- ー15 コロナ禍における在宅リハビリテーションの推進と多職種連携教育 (※)
○須藤 誠
(獨協医科大学日光医療センターリハビリテーション部)

※) シンポジウム採択演題

シンポジウム

- ・テーマ：コロナ禍における業務改善の取り組み
- ・日時：令和3年2月6日（土） 10：00～11：30（予定）
- ・会場：創立30周年記念館 関湊記念ホール

時間	内容
9：30	受付開始
10：00～10：10	開会式
10：10～11：25	シンポジウム
11：25	閉会式

【総合司会】瀬下 嗣人（獨協医科大学学務部）

【開会挨拶】会場：ホール（2021年2月6日 10：00～10：10）

開会挨拶 獨協医科大学SDセンター センター長 種 市 洋
部門長挨拶 獨協医科大学SDセンター 職員研修部門長 伊 藤 公 三

【シンポジウム】会場：ホール（2021年2月6日 10：10～11：25）

座長：瀬下 嗣人（獨協医科大学学務部）

SY-1 コロナ禍—ピンチをチャンスに。医療現場における ICT 化の取り組み—

柴崎 郁子（獨協医科大学心臓・血管外科学）

SY-2 コロナ禍における業務改善の取り組みと学生の感染に係る対応

藤森 祥会（獨協医科大学学務部）

SY-3 COVID-19 感染症病棟体制構築の経過報告

生井 郁子（獨協大学病院看護部）

SY-4 コロナ禍における在宅リハビリテーションの推進と多職種連携教育

須藤 誠（獨協医科大学日光医療センターリハビリテーション部）

【閉会挨拶】会場：ホール（2021年2月6日 11：25～11：30）

閉会挨拶 獨協医科大学SDセンター 副センター長 仁戸部 富 恵

令和3年2月6日（土）に開催予定しておりましたシンポジウムは、新型コロナウイルスの感染拡大状況に鑑みて、やむを得ず中止することとなりました。

O-1

新型コロナウイルス流行早期における抗体保有率の調査

○石川 知弘、高橋 知里、布矢 純一、
佐藤 洋隆、篠崎 由季、増田 道明

獨協医科大学 微生物学

2019 年末に中国の武漢で発生した新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) による感染症 (COVID-19) は、2020 年 3 月に世界保健機関 (WHO) によりパンデミックが宣言され、世界的に大きな影響を及ぼしている。日本でも流行早期から社会不安が高まる中で、医療系教育機関としてコロナ禍における業務改善に取り組むためには、まず現状を客観的に把握することが重要であると考えられた。そこで、2020 年 5 月から 7 月にかけて、学生と教職員の一部 (計 200 名) を対象として SARS-CoV-2 に対する抗体保有状況を調査することとした。当該調査に関して、倫理面での配慮、実施方法および結果について示し、その意義を考察する。

O-2

コロナ禍—ピンチをチャンスに。医療現場における ICT 化の取り組み—

○柴崎 郁子、小川 博永、武井 祐介、
手塚 雅弘、関 雅浩、加藤 昂、
大橋 裕恭、斎藤 俊輔、緒方 孝治、
福田 宏嗣

獨協医科大学 心臓・血管外科学

コロナ禍において、医療現場はリモートワークができない職場であり、そういった環境の中でも ICT を利用した日常診療での我々の試みを紹介する。

カンファレンスは、当科での診療以外に内科や多職種とのカンファレンスが多く、情報共有をするため Microsoft teams を用いるようになった。Web 会議システムの構築により、3 密を避けそれぞれのチームでの web カンファを行うようになり、ラジオ参加など様々なスタイルで参加可能となった。土日も web カンファにより、非番のスタッフと患者情報を共有することができ、安心した管理を行うことができた。今回のコロナ禍をきっかけに医療業界も society5.0 を目指す取り組みをし、患者診療に繋げる試みが必要である。

0-3

看護学部取り組みとその評価 第1報 遠隔授業

○小西 敏子、馬醫世志子、板倉朋世

獨協医科大学看護学部

2020年度前期、看護学部では遠隔授業を実施し、90分の授業時間を『30分の講義+60分の課題学修』に変更した。加えて、講義動画をオンデマンドで配信した。授業開始当初は、学生から出席登録や評価方法に関する不安やオンデマンド配信への要望等が多く聞かれたため、その都度、学生に対応するとともに学内外の教職員に協力を要請した。その結果、学生からの授業評価では、前年度とほぼ変わらず5段階中4.0以上を維持しており、「オンデマンドで繰り返し復習できてよかった」との声も聞かれた。また、「週5時間以上」自己学修している学生は前年度に比べ13.9%増加した。

0-4

看護学部取り組みとその評価 第2報 学生支援

○板倉 朋世、馬醫世志子、小西 敏子

獨協医科大学看護学部

看護学部では、新型コロナウイルス対策として2020年度前期の授業をオンラインで行い、7月上旬まで学生の大学入構は原則禁止とした。その間、学生・教員からの意見を日々取り入れながら、学生支援に取り組んだ。特に1ヶ月半に渡り開催した学生支援交流会では、述べ1,093名が参加し、学年を超えた学生間交流や学生と教員の交流、オンラインヨガ等を通して学生の不安やストレス緩和を目指した。その結果、大学教育・学生生活への満足度は前年度より8-9%上昇したが、対面授業開始後の学生生活アンケートでは学年によって異なる傾向が見られた。継続した学生間交流、健康管理の徹底、学生意見に対する早期の対応が課題となった。

0-5

コロナ禍における業務改善の取り組みと学生の感染に係る対応

○金子 智明

獨協医科大学学務部

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、医学部学生の健康管理やオンライン授業の準備など、2020年3月から業務が急激に増加しその対応に追われることとなった。教務課では、情報基盤センターのご指導とご協力のもと、学内で利用できるICT環境を活用し、学生課と連携しこの課題解決を試みたので、その成果や今後の課題について報告する。

0-5

コロナ禍における業務改善の取り組みと学生の感染に係る対応

○藤森 祥会

獨協医科大学学務部

2020年、年明けより世界中の誰もが予想していない新型コロナウイルスの感染が拡大する状況にさらされた。本学では緊急事態宣言によりオンライン授業に切り換え、日々学生自らの健康観察を義務付け、定刻までに結果を報告させることで感染防止と本事態の重大性を認識するよう指導してきた。

また、医学部学生の病院実習について、感染者が出た場合、甚大な影響が出ることを想定し予防策として8月より学生の唾液採取による抗原スクリーニング検査を実施してきた。コロナ禍の国内情勢において、どのような状況でも学生が安心して学修できる環境を整え、十分な教育を提供できるよう、学生の立場に立った感染防止の指導の強化が必要である。大学の使命は学生の“学修”“健康”“安全”を守る機関でなければならない。

0-6

図書館におけるコロナ禍での対応

○篠崎 徳子, 吉新 裕昭, 森戸 重男

獨協医科大学図書館

新型コロナウイルス感染症により各施設等が拡大防止の対策を余儀なくされる中、獨協医科大学図書館でも、大学の方針に従いながら図書館としての対応を行ってきた。来館者に対する対応はもちろんのこと、コロナ後の社会にて変化する利用者行動を踏まえ、学生や教職員の研究・教育・学修活動の支援を基軸に新規サービスの導入や、従来提供してきた電子コンテンツの拡充等に努めてきた。研究の面では情報化が進んでいたが、教育の面でも2020年4月には授業目的公衆送信補償金制度が早期施行され、情報化への流れが加速している。これらを含めた図書館の対応を紹介し、今後の課題にも言及する。

0-7

看護師特定行為研修の開催状況—コロナ禍での安全な研修をめざして—

○永井 睦子、井上 宗典、早田 美穂、
円谷 亮二、飯村 礼華、廣瀬 紗彩、
豊田 訓子、梅田 奈津美、江口 啓子、
斎藤 裕、仁戸部 富恵、種市 洋

獨協医科大学 SD センター

SD センターでは、2019年10月より看護師特定行為研修を開始した。1期生の11名はすでに1年間の研修を修了し、特定看護師として活動を開始している。また、2期生18名、3期生13名においては、感染予防対策をとりながら中断することなく研修をすすめている状況である。

共通科目・区分別科目の講義は各自 e-learning で学習し、演習は Microsoft teams を用いたテレビ会議、OSCE においては Web 配信等を活用するなど研修方法を変更して実施した。

徹底した感染予防対策のもと、研修生の意欲的な姿勢、各指導医師の理解と協力、研修運営方法の工夫を行い、新型コロナウイルス感染症の発生なく、安全に看護師特定行為研修が進行していることを報告する。

なお、本研修は文部科学省の職業実践力育成プログラム(BP)に認定された(2020.12.23)。

0-8

コロナ禍における安全な研修会の開催 —各研修の目的や内容に応じて—

○円谷 亮二、廣瀬 紗彩、豊田 訓子、
梅田 奈津美、江口 啓子、飯村 礼華、
斎藤 裕、永井 睦子、早田 美穂、
井上 宗典、仁戸部 富恵、種市 洋

獨協医科大学 SD センター

令和元年度、SD センターでは本学の教職員を対象として、延べ35回の研修会を実施し、延べ4,219人の人材育成に寄与した。令和2年度も同規模の研修会を開催する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により上半期の予定は一部を除いて延期・中止とした。

その中で、令和2年度上半期は感染防止対策を施した上で「看護師特定行為研修」「RQI」「教育訓練給付」「iMedy」の事業に専念しつつ、下半期に予定している研修会が安全に開催できるように更なる感染防止対策を整備した。

令和2年度下半期は、上半期に計画されていた延期となった研修会と併せて、当初より下半期に計画されていた講習会を安全に開催しているので、その中から「JMECC」「BLS」「実習指導者講習会」「教育セミナー」の事業についての取り組みを報告する。

0-9

コロナ禍における本校の取り組み

○宇佐見 規子
教職員一同

獨協医科大学附属看護専門学校

平成30年度、かねてからの念願であった無線LANの整備を行い、令和2年度入学生から電子書籍化とし、ICT係を中心に電子書籍を有効活用した教育方法に取り組むことを基本方針の一つとしてあげた。

この度の新型コロナウイルス感染症の拡大により、新年度開始と同時に必然的に遠隔授業に取り組むこととなり、授業としての講義・演習・実習をどのように運用・管理していけばよいか、感染防止対策とともに大きな課題となった。情報基盤センターをはじめ関係する多くの方々のご指導・ご協力のもと進めることができた。

今回、教務関係・学生生活関係等全般についてその取り組みの実際を振り返ることで、改善点並びに課題を見出し次年度に活かすことを目的に報告する。

0-10

COVID-19 感染症病棟体制構築の経過報告

○生井 郁子、上野 秀子

獨協医科大学病院看護部

2019年12月から全世界に発生した新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）は、2020年1月に日本でも発生した。当院では、2月に患者を受け入れる方針を整え、A病棟が該当となった。二次感染防止および患者の増加に伴い、4月からは、COVID-19専用病棟として運用開始し、10月までに14人の患者対応をしている。疾患に関する情報が少ない中、多くの部署の協力を得ながら、看護体制を調整し環境を整備して患者対応体制の工夫をしてきた。みんなで意見を出し、医療者・患者がともに安全・安楽な方法の検討を繰り返しながら、病棟の体制を構築してきた。この経過の状況共有を目的に報告する。

0-11

新型コロナウイルスの重症患者受け入れに対する準備と業務改善

○寺内 浩美、中田 哲也、神馬 千登勢

獨協医科大学病院看護部

当院では初めて2020年2月新型コロナウイルス患者を、救命ICU病棟で受け入れることとなった。感染制御センターと協働し施設のゾーニング、病床の確保、衛生材料や防護関連用具の確保、患者を受け入れるにあたってのマニュアル作成等の準備を進めた。感染患者の受け入れのための人員配置の調整や救命救急ICUに入室する患者調整を行い、安全に新型コロナウイルス患者に対応できるよう体制の構築に努めた。2021年1月まで救命救急ICUでは26名の感染患者を受け入れ、感染の拡大なく治療・看護の継続が図れている。医療従事者のメンタルヘルスケアと患者・家族のケアを振り返り、新型コロナウイルス患者の受け入れに対しての取り組みを報告する。

0-12

コロナ禍における臨床検査センターの取り組み

○新保 敬¹⁾、田中 光昭¹⁾、池田 眞由美¹⁾、
堀内 裕次¹⁾、福島 篤仁²⁾、小飼 貴彦²⁾、
菱沼 昭²⁾

¹⁾ 獨協医科大学病院臨床検査センター

²⁾ 獨協医科大学感染制御・臨床検査医学

2020年2月に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大により、臨床検査センターではその対応を考慮して、研修会や業務を柔軟に実施してきた。研修会では国際規格であるISO 15189 認定維持のため、職員の教育をWeb 利用による新たな形式で開催し、参加者にアンケートを実施したので結果を報告する。また、慢性的に混雑状態となる外来採血室では、採血台の飛沫防止や外待合エリアの混雑防止のために、採血呼び出し番号表示ディスプレイの増設を行った。さらに、現地以外でもクラウドを利用して採血呼び出し番号を確認できるシステム（Junban-watch）を導入したので、その利用状況について報告する。

0-13

C4 病棟における取組

○寺澤 友恵

獨協医科大学埼玉医療センター看護部

脳外科病棟から COVID 患者受け入れ病棟への役割変更で生じた問題についての取り組み。

0-14

重症 COVID-19 患者受け入れ

○安藤 和子

獨協医科大学埼玉医療センター看護部

COVID-19 の重症患者受け入れにて、環境調整だけではなくスタッフの意識向上と支援、教育体制を構築し維持するためには、病院一丸となることが必要であると再認識した。管理者として、スタッフの意識改革やメンタルケアは緊急重要事項であった。そして、社会情勢に応じて変化する体制づくりには、多職種の協力が必須であったことを伝えたい。

0-15

コロナ禍における在宅リハビリテーションの推進と多職種連携教育

○須藤 誠

獨協医科大学日光医療センターリハビリテーション部

新型コロナウイルス感染症禍により、地域住民の外出は最小限に制限され、生活の中で運動をする機会は激減した。もともと生活の中での運動によって身体機能を維持していた高齢者にとって、これらの制限は身体機能の著しい低下を脅かすと考えられる。また、それらを支援する医療介護専門職は研鑽をするための学習機会が減少し、新人を含めた教育体制が十分に発揮できない状況がある。

われわれは在宅リハビリテーションを推進するため、在宅でできる運動動画を作製し、比較的安易に閲覧できるツールを用いて地域住民に提供した。また、多職種間で行う教育ツールとして、研修動画の作製及びWebコンテンツの利用を促進した。これらの取り組みを通して、リハビリテーション、多職種連携教育のNew Normal について考察する。

令和2年度 獨協医科大学教育セミナー 抄録集

2021（令和3）年2月22日

編集・発行 獨協医科大学 SD センター
〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町大字北小林 880
電話：0282-87-2494